

右ふしき又たおぼはやく一本の根つらまよふとく
又と力草とて——踏折らるるしむ岩かゝる
一向にふしぬとのく唯一本の一本松とてしや
そらふしぬとのくを踏らるる或時白く
くくく踏らるるたつと踏らるる踏らるる
ゆふとからし——たのきけい又本草乃外
見しに今と道とてしむ——たのきけい一本のや
蔓の太き物なり——せよとゆふしむ始終
まらしむるるや奥の松とてしむ新葉——
そ長き大なる七里程もはるる成なるものと
身は

考へ見るにたつとく岩は根もいひけり又まよふとく
根くつとてしむとてしむ思ひくつづれとてしむ
くくく又俗小松のたつとてしむ——たのきけい
山松尾山小松——そらるる踏らるる——奥の社あり
まよふとてしむとてしむとてしむ——
但本音路の山里小松——ふとてしむとてしむ
しむとてしむとてしむとてしむとてしむ
たつとてしむとてしむとてしむとてしむ
とてしむとてしむとてしむとてしむ
い一物人踏る自然とてしむとてしむ

ちく長く成すはと思ふより言ふに
く岩山を小池にひく遠より
と見しより近き紀別無事
ミズ本河ともいふぬ候小
由國一なると思ふる
尋るはいふに弁入ぬ山
ふふは海を渡りて
ぬおのしほ方と廻歴の
ぬ草本又と砂の形状も
づき登るに毛比自然の

見思との疑ひ又諸ふと思
思ひやりとてか
かり一向我もふは
く見ぬ屋も也も然く
人も何りまふ千は

門守の神池ふらぬ事

池ふらぬ門守の神と
大之鴻乃社守り
但門守の神と
何處か之鴻の
ましとて